



# 支援員だより

発行者：山口県・財団法人山口県ひとづくり財団

## もくじ

- P 1 講師寄稿「秋吉台の花たちと語り合って13年」
- P 2 支援員さんの声
- P 3 講師寄稿「中程度の攪乱説」  
次回研修のご案内
- P 4 外来生物について

## 秋吉台の花たちと語り合って13年



研修会講師：中沢 妙子氏

草原に生える日当たりが好きな草の多くは、花が開いたり閉じたりするタイミングが微妙に異なり個性豊かですが、中でもキンバイザサとイシモチソウは、5月、私の誕生日ごろに咲き始める、悩まされ続けている花の代表です。

小さなお星様のような花が地面すれすれに咲くのがキンバイザサ。観察してきた結果から、「朝から日差しが強い日には正午を過ぎるとしぼみ始めます。雨の日には花は咲きませんが、開花後に雨が降り始めてもキンポウゲやリンドウのように閉じたりはせず、雨の中で開き続けます」と、言ってきました。それが先日、激しい雨の中、辺り一面、100個くらいの花が濡れて咲いているのを目にして、愕然。ちょうど開花の時間帯に雨が降っていなかったから咲いたのでしょうか？



キンバイザサ

早朝から雨が降り続いていた翌日、恐る恐る確かめに行ったら、一つも花が見られなかったので、ほっと胸をなで下ろしました。が、まだ分かっていないことがあります。前日に咲く準備が整った花は、朝から雨でも咲き、連続雨になると開花準備ができなかったため、2日目は咲かなかったということも考えられます。

イシモチソウは、図鑑に「湿地に生え、花は10時ごろ開いて、午後早く閉じる」とありますが、秋吉台では地面が乾いた草原に生えていて、「花は晴れた日の11時ごろ開き、午後2時にはしぼんでしまいます」と説明してきました。

先日の晴れた昼前、友人たちとこの白い花の撮影を楽しんだあと、一人遅れた友人と午後1時過ぎ、「どうか、まだ開いていますように」と、祈りなが斜面を駆け上がりましたが、花は一つ残らず半分閉じた状態でした。イシモチソウの花に会いたくて、仕事の休暇を取って来た友人をそばにして、私の持論が間違っていなかったことを素直に喜ばせませんでした。

3日後の日曜日、その友人は、「今年は今日しか時間が取れない」と、曇り空の下でイシモチソウが咲くかと聞いてきました。自宅にいた私の歯切れの悪い説明に、「とにかく行ってみる」と。昼過ぎ、私も秋吉台に到着したところ、曇りながらもムツとした気温で、「私がイシモチソウなら咲く！」。友人に携帯をかけると、「やっと開いたイシモチソウの花が撮れました！」と。

先日、雨の中、カメラを抱えて歩いていたところ、出会った女性に「雨の日の方が写真がうまく撮れるのですか？」と聞かれました。1300種余りの植物の開花確認を遅れないように行っていくには、雨だからと休んではいけない事情があるのですが、その女性の目には、きっと、私が楽しんでいるように見えたのでしょう。

まだまだ対話が十分でない植物がたくさんあるし、問いかけても答えを教えてもらえなかったりで、知りたいことは山ほどあります。

これからも私の飽きっぽい性格をだましながら、体が続く限り、秋吉台の花たちと語り合っていきたいと思っています。あと何年続けられるのか分かりませんが・・・。



イシモチソウ

# 秋吉台エコ・ミュージアムで研修会を実施しました <5月14日(土)>

研修会では、講義「支援員の役割」、「草原ふれあいプロジェクト」、と野外観察会「植物観察」を行いました。「支援員の役割」は、生物多様性や特定外来生物の駆除の必要性、絶滅危惧種のツキノワグマに対する県の対応や生態等の説明と遭遇した場合の対処等について、「草原ふれあいプロジェクト」では、活動の目的、秋吉台草原の現状、プロジェクト実施による草原の変化等についての説明と現地の視察を行いました。「植物観察」は、真名ヶ岳方面を廻るコースで、ハシナガヤマサギソウ、ヤマサギソウ、タカサゴソウ、シラン、アマドコロ、ササの花等 50 種類以上の植物を観察し、掘り返した跡が残る盗掘現場も目の当たりにしました。



## 支援員さんの声



日々の生活の中での自然に対する思い、研修会の感想等をお寄せいただきました。

今回は、大上香代子さん、藤村倅一さんの声をご紹介します

### 「研修会に参加して」

大上 香代子

広大な新緑の草原に草を食む白い羊の群れを思わせる石灰岩の起伏、いつも秋吉台に上がると、気持ちがパツと解き放たれる様な開放感を味わいます。

しかし私達にとっては広大な草原も、かつての面積の30%までに減少してしまっているとの事、比較図を見てびっくりします。良好な草原状態を保つには、ソースとシンクの局所個体群がパッチ状に分布している事が重要であると何やら耳慣れぬ講義の後、現地で観察をしました。今までこんな視点で観察をした事がなく非常に印象に残りました。

しかし、人々の暮らしと自然とが密着していない現在では、保護という相当の努力を払わなければ、こうした美しい草原景観を維持していけないのではと危惧されます。

午後、真名ヶ岳への遊歩道沿いの植物を観察しました。カノコソウはちょうど咲き始めの草姿が一番美しい頃でスックと立った茎の様は、あの小さな散形状の花とは対比的です。山溪の図鑑によると、山地の湿った草地にやや希とあるが、少年自然の家へ至る道路の山裾の溝など、至る所に咲いていました。

多賀谷先生が「この辺にシランがあるはずなんです」と言われるのを耳にして「えっ、シランって園芸品種ではないの？これは帰ってからの宿題だわ」と思いながら歩いていると「ありましたよっ」の声に急いで登って行くと、赤紫と白の二種類があり、しかもかなりの数のシランが今を盛りと咲いていました。

その他の資料として戴いた写真の花も沢山観察することができ、車で走り抜けるだけでは決してわからない秋吉台の花を実感しました。

6月10日、市内の団地の山裾の道路脇に“ソクシンラン”を見つけて、アッあの時の花だと嬉しくなりました。観察会のお陰です。

これからも「わたし流、ただ好きなだけの花見」を続けていきたいと思いました。



シラン

### 「平成23年度希少野生動植物種保護支援員研修会に参加して」

藤村 倅一

今回の研修会は秋吉台の植物観察会が行われるということで、参加をいたしました。午前中の講義は、秋吉台の草原を守るために行われている春の山焼きの話がありました。草原は、手を入れずに放置しておくで段々草原が失われていくので、実験的に原野になったところの草原を復元するために、「復元プロジェクト」が行われ、草原が復元しているとのことでした。この話と同じ現象が起きている事柄を紹介します。私が住んでいる山口盆地のシンボルの山、東鳳翽山は標高こそ低いですが、頂上から360度の展望が素晴らしく、晴れた日には、大分県まで見渡せます。この山に登りだして半世紀が過ぎ、

その間に変わったことは、中高年の登山者が圧倒的に多くなったことと頂上付近に雑木が多く、秋の草紅葉が見られなくなったことでしょう。20数年前までは山口盆地からこの山を眺めると秋には頂上付近が草紅葉となり、秋になったなあ実感したものです。原因は、昔は時々、山火事が起きていたことによって、幸か不幸か草原が守られていたものと思われま



東鳳翽山頂上付近

ところが、近年山火事が起きなくなったために、雑木が大きくなり草原が減り、草紅葉が見られなくなったものと思われます。

また、午後の研修で、秋吉台の植物観察会に参加し、先生から路傍に生えている野草の話をしていろいろ聞きました。今まで山や散歩など漫然と歩いていたものが、路傍の小さな草花に目がいくようになり新しい発見をするようになり、研修に参加してよかったと感じています。

## 中程度の攪乱説



研修会講師：田原義寛氏

生態学の学説に「中程度の攪乱説」というものがある。攪乱とは、ある地域の生物種に対する様々な影響のことを呼んでいる。具体的には、台風や火山の噴火といった自然災害、人為的な環境変動、生物の捕食などである。攪乱が大きすぎず、小さすぎず、ちょうど中程度にあるとき、その地域の生物多様性は最大になるといわれている。これが中程度の攪乱説の内容である。では、中程度の攪乱とは一体どの程度なのか。良いお手本がわれわれの身近なところにある。

すなわちそれが里山の環境である。里山は、自然と人間との営みがうまく共生して、永続してきた環境である。山での落ち葉かきや、炭焼き、草原の採草、畑の耕作、水田の田植えなど、人間の暮らしの中で繰り返されてきた行為がバランス良い攪乱となり、生物多様性の高い環境が保たれてきた。また日本では、各地に里山があり、豊かな自然環境をすぐ身近なところで見ることができる。

一方、近年の里山では、攪乱のバランスが崩れ、生物の多様性が低くなってきているとの指摘がある。日本の絶滅危惧種の約5割が里山の生物であることも、そのことを象徴する事例である。しかしなぜ、5割もの絶滅危惧種が里山に集中しているのだろうか。一つには、効率化を図るため行われた、農地の大規模区画整理や、機械化により、より大きな攪乱が行われ、その攪乱に耐えられる種しか生き残れなくなっている状況が挙げられる。そしてもう一つは、里山に暮らす人の減少や、生活様式の変化により、人間の攪乱が小さくなった結果、少数の独占種により、生息環境が占められている可能性がある。

秋吉台を例えに話を進めると、秋吉台はかつて、地域の資源を得る貴重な里山であった。6月から7月の梅雨時に、草原のササやススキは大きく成長し、一番草として、周辺の農家に刈り取られ、畑の敷き草や堆肥として利用されてきた。また使役動物として牛や馬がそれぞれの家に飼われ、そのエサとして、草原の草が刈られてきたのである。そして、草原のあちこちに生えるワラビは食用に、秋に花の咲くセンブリは薬草として利用されてきた。こうして様々な利用される草原は、地域の大切な里山であると同時に、適度に人間



草刈り跡のお花畑

に活用されることによって、ほどよい攪乱が起きてきた。それによって多種多様な草原性の動植物が生息する環境が創出されていたのである。ところが現在の草原は、かつてほど草の利用はない。もちろん、草原を保全する要となる攪乱、「秋吉台の山焼き」は毎年行われている。ただ、それだけでは草原の生物多様性を十分に高めていないことが最近の研究から分かってきた。秋吉台の草原にとって、生物多様性がより高まる「中程度の攪乱」とは、果たしてどのようなバランスなのか。そのことを念頭に、草刈りに汗を流している。

### 次回は、10月23日（日）山口湾での干潟観察会等を開催

榎野川が注ぎ込む山口湾は、かつては希少種も多く豊かな海でした。平成13年12月に環境省が選定した「日本の湿地500」にも選ばれましたが、現在では、アサリや魚類、生息する鳥類も減少するなど、漁業や生態系の面からも好ましくない状況となっています。

そのため、平成15年度から干潟の詳細調査や実証試験、モニタリング調査を行い、干潟再生手法の検討を行ってきました。現在、漁業者や地域住民等が協働して干潟における耕耘や有害生物の駆除等保全活動に取り組んでおり、アサリの成長等の成果が出ています。

研修会では、干潟における保全活動等について講義し、現地の生き物観察を行います。

※ 「日本の湿地500」に選定された理由は、カブトガニ、ツバサゴカイ、タイラギ、マゴコロガイ、セトウチヘソカドタマビキなどの全国的にも希少とされる種が数多くまとまって生息することです。

# 外来生物について



山口県自然保護課

外来生物とは、もともと日本にいなかったのに、人の活動に伴い海外から入ってきた生物のことで、明治以降、多くの外来生物が、ペットや展示用などの目的で輸入されたり、荷物に紛れ込んだりして日本に入ってきました。

外来生物の中には、繁殖力が強く、従来の生態系や人の生命・身体、農林水産業に悪影響を与えるものがあり、特に影響の大きいものは、外来生物法により、特定外来生物として指定され、飼育や栽培などが原則禁止されています。今回は、外来生物の中の植物についてご紹介します。

## 1 オオキンケイギク

オオキンケイギクは北アメリカ原産のキク科の植物で、明治の中頃から観賞用や緑化用として、日本に移入されてきました。5月から7月の間に黄色の花を咲かせ、見た目も鮮やかなうえ、根がよく発達し、荒地でもよく生育するので、緑化に使用されたり、園芸用として販売されてきましたが、繁殖力が強く、在来の植物を駆逐するなど悪影響を与える恐れがあることから、平成18年に特定外来生物に指定されています。



オオキンケイギクは多年生草本のため、いったん刈り取ってもまた生えてきたりします。また、種を作り、種からも芽を出すため、何もせずに放っておくと年々増え続け、もともとそこにあった植物の生育を脅かします。

もし、家の周りで見つけた場合には、種ができないうちに刈り取り、お住まいの市町のゴミ出しルールに従って、処分してください。

## 2 オオカナダモ

オオカナダモは南アメリカ原産のトチカガミ科の沈水植物で、植物生理学の実験植物として日本に導入されてきました。現在でも、中学校や高校の理科の授業（光合成の実験）の材料として利用されたり、熱帯魚等の飼育用に「アナカリス」という名で流通・販売されています。



野生化したオオカナダモは、湖や川などの止水域や流れの緩やかなところに生育し、冬期も枯れずに越冬します。日本では雄株のみで、種子生産は確認されていませんが、栄養繁殖が旺盛で、殖芽や茎葉断片で大繁殖し、在来種の植物を減らすなどの悪影響を与える恐れがあり、要注意外来生物として、適切な取扱を行うこと（法規制はなし）が求められています。県内においても河川などで生育が確認されており、農業用水の取水などに支障がでています。

実験植物として移入された外来生物が、何らかの要因により野外に出て行ったことで繁茂し、悪影響を及ぼしているもので、外来生物をむやみに野外に捨てないということが重要です。

## 3 外来生物による被害の防止

外来生物のことをよく知らない方もいらっしゃると思います。支援員の皆様も身近な方から周知していただければと思います。

### 外来生物被害予防三原則

- 悪影響を及ぼすかもしれない外来生物をむやみに日本に**入れない**
- 飼っている外来生物を野外に**捨てない**
- 野外にすでにいる外来生物は他地域に**拡げない**



発行元：(財)山口県ひとづくり財団 県民学習部 環境学習推進センター  
〒754-0893 山口市秋穂二島 1062 TEL 083-987-1110 FAX 083-987-1720  
<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/>

